

子どもの死因の第1位は不慮の事故

山中龍宏

緑園こどもクリニック(横浜市泉区)

1960年以降、0歳を除いた小児の死因の第1位は不慮の事故となっている。先進国と比較すると、わが国の乳幼児の事故による死亡率は高く、改善の努力が必要である。事故は、子どもの最も重要な健康問題なのである。

事故につく形容詞として「運悪く」が頻用されている。事故と同じく健康に対する障害である病気にも「運悪く」という形容詞をつけて納得できるだろうか。医学が発達していない時代は、運悪く病気になり、お祈りをして邪気が払われた。現在、「運」で病気になるとは考えられていない。病因の究明が徹底して行なわれ、それに合った治療、予防手段が開発され、病気が克服されつつある。

事故を運の悪い事象と考えていては、決して防ぐことはできない。子どもの発達にともなって起こりやすい事故のパターンは決まっており、その具体的な防止方法もわかっている。

現在まで、事故の防止指導はどのように行なわれてきたのだろうか。最もよく言われるのが「子どもの事故は親の責任」「親が不注意だから事故が起きる」という指摘であった。保健婦の中には、「私はいつもおかあさんに、手は放して、目は離さないでと言っています」と胸をはって言う人もいる。子育ての経験のある人なら、こんなことは不可能なことはすぐわかる。最近20年間をみても、医療機関を受診するような小児の事故の発生率に変化はみられていない。すなわち、「親の不注意」という指摘は何の意味も持たない。事故は健康を

障害する事象として科学的に分析し、①重症度が高い事故、②発生頻度が高い事故、③具体的な解決方法がある事故について、優先的に取り組むべきである。『子どもの誤飲・事故を防ぐ本』(山中龍宏著、三省堂、1999年)で、筆者はわが国の子どもの事故の実態、その具体的な予防法、今後の対策について述べた。

子どもの健康にとっての最大の敵は「不慮の事故」であることを再認識していただきたい。子どもの健康を守り、増進する仕事をしている医療関係者は、積極的に事故防止活動を展開する義務がある。助産婦が積極的に関わるべきものとしてチャイルドシートとクーハンがある。

母親学級の時にチャイルドシートの必要性を指摘し、チャイルドシートの購入をすすめよう。赤ちゃんが退院するときは自動車まで見送り、新生児が乗車する状態をチェックしてみよう。まず、できることから始めよう。チャイルドシートをすすめるパンフレットを1枚、妊婦さんの目につくところに貼るだけでもよい。具体的な活動、指導法がわからないときは、NPOである「子供の安全ネットワーク・ジャパン」(FAX 075-791-0312)に問い合わせよう。

クーハンからの転落もよくみられる。クーハンの危険性についての資料(国民生活センター、くらしの危険No.227, 1999)を見せ、クーハンが必要かどうか考えてもらおうとよい。

助産婦の「育児支援」の重要項目として、「新生児の事故防止」に取り組んでいただくよう強く希望する。

